



発行所 島根日日新聞社 〒693-0001 出雲市今市町743-22

山陰あれこれ

90

令和2年5月22日掲載予定

人を買う話

酒井 董美 ただよし

「人を買う話」とは、実に物騒な話題を出したとお考えになる読者もおありだろう。村里の習俗を聞き書きしていると、思いがけなくこのような話にぶつかることがある。筆者が鹿足郡吉賀町の柿木中学校に勤めていた昭和40年(1965)ごろ、毎週のようにお訪ねした同町椈谷の大田節蔵さん(明治28年・1895・生)からうかがった話である。明治の末ごろまでのこと。福川地区(明治時代の人口推定250人)で10人くらい買われてきた人たちがいたようだったという。一人当たりの価格は手数料を含めて50銭だったそう。年齢は15歳から17〜18歳くらいが普通であり、男性よりも女性が多かった。また出身地は広島方面だったという。売られた理由は、家が貧しく、いわゆる口減らしのためだった。つまりその人たちは家の犠牲になったというのである。

これは一種の人身売買であるわけだが、買い取った側では、農業の働き手として彼らを使い、俗に言う人権をまったく無視した奴隷のような扱いとは無縁で、形式的には養子縁組の形を取る場合がほとんどだった。しかし、当時のこととて、役場に戸籍上の届けを正式にしたものは少なかつたという。それらの人びとも、やがて年頃になると、嫁を取り家を構えさせてやったりしている。女性の場合は嫁に出したりしたと思われる。彼らもよく働き、こちらに來たことを喜んでいたそう。

それでは一体誰がどのように人を売り買いかといえ、吉賀町七日市(旧六日市町)田丸地区に、そのような仲買人はいたという。大田さんの話では通り名を「ボンコウ安」と言われており、そのころ50歳くらいの男性だったという。この人は頭が大きく魚のボンコウ(吉賀地方の方言。ハゼ科カワアナゴ亜科ドンコ属。全長25cm)に似ているところから來たあだ名だった。

彼は山口県徳佐や広島県の方へ牛を売買するのを生業としており、毎月2回くらい往復していた。そして村人から頼まれれば、心配料(手数料のこと)10銭ほどで、10日も経たぬうちにきちんと人を連れてきてくれた。頼んだ方では50銭以外に支払うことはなかつた。つまり仲買人としてはその中から手数料として10銭を得ていたということになる。「テマ(手間)労働力」が欲しけりゃボンコウ安に頼め」とは、そのころ蔭でささやかれていた言葉だったという。

ところで、当地では以前から広島県方面との交流は深く、大正時代までは広島県山県郡との行き来が多かつたから、木挽きや木出し、あるいは土臼作りと、福川、椈谷地区だけでも常に40〜50人の人たちが入ってきていた。そのうちこちらに住みついた人も少なくなかつたのである。もちろん、その人たちが全て買われてきた人というわけでは決していないが、このような両地方の深い交流環境が、人の売り買いの背景にあったことも事実だつたよう。

「人を買って買える」……どこか遠い世界の、しかもはるか昔の出来事のように考えられる今日ではあるが、案外、最近まで、このようなことは私たちの身近なところで行われていたのである。(元島根大学法文学部教授)